

25

21

3

4

6

9

16

36

170

174

176

35

57

46

75

9

14

4

12

8

20

21

22

20

30

2

2

2

3

3

3

48

1

5

7

157

134

16

134

170

174

176

35

57

46

75

9

14

4

12

8

20

21

22

20

30

2

2

2

3

3

3

25

1

2

5

15

18

21

37

91

98

70

42

73

68

78

48

8

3

16

3

21

4

1

19

15

37

15

24

35

10

10

10

23

21

33

18

15

11

12

8

3

5

14

31

17

3

16

3

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

30

31

32

36

35

12

13

8

3

5

14

31

17

3

16

3

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

46

37

36

48

34

15

11

12

8

3

5

14

31

17

3

16

3

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

47

53

48

50

34

15

11

12

8

3

5

14

31

17

3

16

3

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

94

76

92

80

85

58

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

92

88

85

80

85

58

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

17

12

8

23

1

24

33

35

1

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

68

12

8

23

1

24

33

35

1

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

8

## 牛込地区 江戸時代からの街

地域の特徴 江戸時代は中心地を外れたこの地、外堀の外側に御家人や下級武士(御徒)の住宅が広がった。

明治大正期には良質な住宅地として、政財界の大物、諸官庁の官舎等があり、現在も一部残されている。

牛込 東京 35 区時代は牛込区であったが、戦後 四谷区と一体になり新宿区となった。

「火事はどこだ 牛込だ 牛の金玉まる焼けだ」と子どもたちは歌いながら歩いたものである。

1970 年代に住宅表示改正で全国的に歴史・伝統のある旧町名を新表示に切り替えが進んだが、この地はそれが残されている数少ない事例である。

①試衛館跡 近藤勇の天然理心流の道場跡地。ここで土方歳三や沖田総司、原田佐之助、山南敬助達が集まり剣術の腕を磨き新選組はじまりのきっかけとなった場所  
・野本耳鼻咽喉科医院

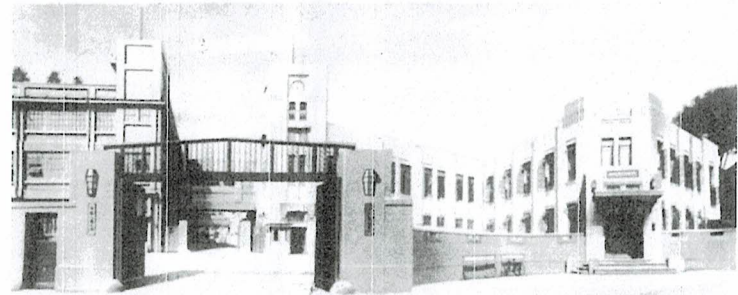
②裏千家今日庵 御木本家と岳父伴野清(大蔵官僚、俳人)の所有地を引き継ぐ。  
・トモノホール  
裏に梅原龍三郎 前に入ったところに与謝野馨

③柳田国男邸跡 民俗学者柳田國男(1875-1962)が明治 34(1901)年から昭和 2(1927)年に成城に転居するまでの 27 年間を過ごした場所。市谷加賀町時代の柳田は、官僚として農事視察や講演で全国を巡り、地方の実情に触れるうちに次第に各地の民俗に関心を深めていき、初期三部作と呼ばれる『後狩詞記』(明治 42 年)、『石神問答』『遠野物語』(明治 43 年)を著した。

## ④市谷の杜 本と活字館

大日本印刷が、活版印刷を中心とした印刷所を、印刷の美しさや奥深さ、楽しさを体感していただきたいという願いをこめて設立した。

写真は再開発前の姿 右手に工場があった。



## ⑤浄瑠璃坂の仇討ち跡

寛文 12 年(1672)に宇都宮奥平家の元家臣 42 人が、敵である同じ奥平家の元家臣を討つために、江戸浄瑠璃坂上の屋敷に討ち入った事件。説明版参照

## ⑥浄瑠璃坂界限(市谷砂土原町)

かつてこの地は大規模な邸宅街であったが、令和になり広大な宅地が中層の高級マンション街となった。超高層マンションが人気の最近の風潮はあるものの、この地域は市内でも指折りのハイグレード地域とされている。

・小菅丹治(伊勢丹) ・中部謙吉(大洋漁業) 木原崇雲 勅使河原

外堀通りをしばらく歩く

⑦逢坂とその周辺 小野美佐吾という人が武蔵守となり、この地にやってきた時、美しい娘と恋仲になる。その後、都に帰って没してしまうのですが、娘の夢でこの坂でまた逢うことができたという伝説に因む名前。かなり急坂で江戸時代は段坂(緩やかな階段状)であった

・日仏学院 フランス政府公式の語学学校・文化センターで、フランス語を学ぶと同時に、映画や講演会、展覧会などのイベントを通じて、フランス語圏の多様な文化と触れることができる場。

・古河邸、池谷邸が坂の北側に、石川啄木旧居跡は南奥(安田火災)にあり。

⑧**最高裁判所長官公邸**(重要文化財) この地は鈴木春信のスポンサーとして浮世絵文化を育てた大久保甚四郎邸跡で、建物は1928年(昭和3年)に富山県の北前船廻船問屋として巨万の富を築いた馬場家の牛込邸として吉田鉄郎の設計により建築されたものである。

向かいのスペイン瓦の西洋館は、旧穂積陳重邸(日本国最初の法学博士 枢密院議長) 渋沢栄一の長女歌子と結婚し、この地1200坪を与えられたもの。

⑨**御徒組跡** 北町、中町、南町は江戸時代は將軍の警護や本丸御殿の玄関に詰める下級幕臣で、道の両側が組屋敷である。御徒は年収70俵 5人扶持。敷地100坪 狂歌師 太田南畝(幕府登用試験ではトップ)は、この地で数回転居している。

#### ⑩**宮城道雄記念館**

生後200日で目の病気をわずらい、また、4歳の頃には生母と生き別れ、祖母のミネに育てられた。

8歳で失明の宣告を受けた道雄は、生田流の二代中島検校(けんぎょう)に入門。

11歳の時、三代中島検校より免許皆伝を受け、師匠の「中島」の1字を許されて、芸名『中菅道雄』となりました。

伊藤博文に認められ、伊藤は道雄を上京させて後援することを約束しましたが、…  
・近くに俵田邸(宇部興産)

大久保通りを越え、袖摺坂を上る

⑪**尾崎紅葉旧居跡** 明治24年から没年までの12年をこの地で過ごした。2階に書斎と応接間、1階に門下生(泉鏡花ら)が起居していた。

## 町名の由来

江戸時代からの町名が残っている。

○旗本の屋敷や幕府御家人の組屋敷地域

納戸町 將軍の財産の出納、献上品・下賜品を取り扱う役人「御納戸」がこの地を拝領したことから。

箆笥町 具足奉行組同心、弓矢鍵奉行組同心が用いた武器の総称「御箆笥」が地名の由来 組屋敷を構成

払方町 幕府の財政を担当する「勘定所」の支払いに関わる役人が住んでいたのが由来

細工町 江戸城内の建物や道具を制作・修理する「御細工」が拝領したことが由来

○北町 中町 南町 幕府御徒組の組屋敷で当時は北御徒町 中御徒町 南御徒町と呼ばれていた。

○職務から

鷹匠町 鷹狩りの際の鷹を飼育していた役人鷹匠の屋敷があった。

二十騎町 御手先組で10騎編成の与力2組に与えられた屋敷地

山伏町 山伏修験者が住んでいた。

○その他

砂土原町 江戸初期の開拓地で、本田佐渡守の屋敷があり俗称「佐土原」といったことから